



伏見傳
二集
四集
桂松評

增
607
92





門信
號 600
卷 92

特

已回
月日
少

俠客傳第二集
愚評



俠客傳分二集墨評

第十一回

先よふをいへ館小六ういぞうちまをいへるまを
 小若者時不無常のち山里越てさうあるハ
 一いふみいふかへたねとてのらぬのまゝ又たわが
 一一人あつたまめあつたまゝいふ日曲解かつていふ
 一おきいへあつたまゝいふてそねらうま入野修し
 一静定、眼あつて耳ききかゝるいふこゝろをあ
 一たりふ忍の人知らういふとあくまを力あつて
 一てハかきとらうかゝき又あつたまゝいふいふいふ

敵役と云う一はあまのうつくしきおとこあはれなま
敵井の場の論はをばいしこの清月りら
いと馬あし

この物語は初編金川の辰を義法村長討死
の物語の世意さし
ちりをはみ義隆方のいささのふくこを敵役
のいささのふくこを討死し
あつるにも自由自志のあつるをさし
われをさしてはる清月りら
この昔のうつくしきおとこあはれなま

あまのうつくしきおとこあはれなま
夜は敵討をさしあはれなま
いと馬あし

つ、十才ふくね打ちの敵討をさしあはれなま
の陽あつきあまのうつくしきおとこあはれなま
同十八才母同ヤヤトおしあはれなま
わらひてこのあまのうつくしきおとこあはれなま
同十九才水火既済のあつきあまのうつくしきおとこあはれなま
いと馬あし

けつりつものつらき... 隠居のつらき... 隠居のつらき... 隠居のつらき...
 隠居のつらき... 隠居のつらき... 隠居のつらき... 隠居のつらき...
 隠居のつらき... 隠居のつらき... 隠居のつらき... 隠居のつらき...

その... 隠居のつらき... 隠居のつらき... 隠居のつらき...
 隠居のつらき... 隠居のつらき... 隠居のつらき... 隠居のつらき...
 隠居のつらき... 隠居のつらき... 隠居のつらき... 隠居のつらき...
 隠居のつらき... 隠居のつらき... 隠居のつらき... 隠居のつらき...

曾ら月おのりわて人おぢよふんちんぐくねよしんて
序書ふんいん毎を毎ら

二、四才わ六、引梅よりふしんちんちん物しあふ
感し

安同主従の格取の行(捨使あうて不足言信の
けし、物元とらじつづしんちんちんて安同主従の格
後そてけねをのんちんちん梅くしんちんちん徳
意の意あふしん

其信の安同主従の格取の行(捨使あうて不足言信の
格取をあうてあふしんちんちんちんちんちん其信が

物し兼りしんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

首をちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

かて目し兼りしんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

あしんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

似しんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

其信の物(捨)しんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

りしんちんちん

遊行寺の著る辰方編の照意しんちんちんちんちんちん

小六、凌、系譜の便忽然として終の言ひしそわ
女仙出陣してわがものゝつのは天武大友の御事を
ひらけて南北の兩帝をその沛再来の物とせざる論
古人未嘗の論をいひて後し——すしてこわして
中他、わがことさすす向ひかゝるの事ありて都あり
さうの事あり——再と再と感後感ありあり——深
くさうもさあきあり又さきさき——深くさうの
替りの沛方と信ちの信あり——いひて
こわして姑蘇姫のこをこわしてわがもの事ありあり
こわして信ちの信ありありと感ありありこわして
こわして信ちの信ありありと感ありありこわして

こそ考とここの姑蘇姫のこわしてわがもの事ありあり
とありありと

三程の信ちの信ありありとこわしてわがもの事ありあり
必用のこわしてわがもの事ありありと

を信ちの信ありありとこわしてわがもの事ありありと
こわして信ちの信ありありと

唐者の呼吸ありありとこわしてわがもの事ありありと
つびとせられありありとこわしてわがもの事ありありと
ありありと

本よりおろす、と難儀の溝よりきを借入のうらむ
りて本よりを生活にせしものあり、いふ言ふあつし
はらうそいふおしあし

才十六浦

老木、昔よりいひいふおのぼるおのぼる
書よりわけておのぼるいひいひいひいひいひ
おのぼるおのぼるいひいひいひいひいひいひ
のお約より

小六、書下の冠丸田の徳をいひいひいひいひいひ
いひいひいひいひいひいひいひいひいひいひ

三十一才、書中よりわけていひいひいひいひいひ
いひいひいひいひいひいひいひいひいひいひ
いひいひいひいひいひいひいひいひいひいひ

小六、書中の書の中よりいひいひいひいひいひ
いひいひいひいひいひいひいひいひいひいひ
いひいひいひいひいひいひいひいひいひいひ
いひいひいひいひいひいひいひいひいひいひ
いひいひいひいひいひいひいひいひいひいひ
いひいひいひいひいひいひいひいひいひいひ

いひいひいひいひいひいひいひいひいひいひ
いひいひいひいひいひいひいひいひいひいひ
いひいひいひいひいひいひいひいひいひいひ
いひいひいひいひいひいひいひいひいひいひ
いひいひいひいひいひいひいひいひいひいひ

その本の信をいひいひいひいひいひいひいひ
信守、信守、信守、信守、信守、信守、信守、信守
信守、信守、信守、信守、信守、信守、信守、信守

あつらわぬらむとて

小六の足司のりしひきまらぬとて世を悔ひ

らむとてふ本来をきて驛馬のりし上侍のりし

らむとて

信長の縁掃きとては上侍のりし侍のりし

ありては侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし

侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし

侍のりし

廿二の侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし

侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし

あつらわぬらむとて唐書に侍のりし侍のりし

小六の信長をすまふ侍のりし侍のりし侍のりし

侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし

侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし

侍十八回

廿二の侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし

侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし

侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし

侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし

侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし侍のりし

せられて将曹の便船のせておるのよむ向いの船に
こぬりも難治の場よりききき幸自れのことありて
稲城の田園家定をうらむひてとて初巻をきき
のこしきききききききききききききききき
らねるものな

五ノ十二ウわねきしめ実もよより表懐ききりあ
りしをまて候し又又感りせり

小六のたぶつみより半隻履をいしてあつる辰自
郎のつたねるこころ前編の思意いふてききき
半隻履のことらわて又後さみんと書きわて

何から何まであそびのなきに感つて

五ノ十五才もききききききききききききき
しきいあききしてまて候し又又感りし

才廿回

姑麻子娘のこころを先きききききききききき
こころをつてあしてその事の起ハ舊記宮原にありき
きりみりこわしきききききききききききき
一感りし

姑麻子娘を隔るわい前夫婦がゆりききききき
館大穴夫婦の小六ききききききききききき

五ノ下才正行墓を往生院と書き候なり 同下ウ
正行墓行末云ニテ新ありと云々されぬは母御あり
と往生院の墓は後人の依り別屋村にあるとの
の墓にこの事と云候をり 別屋村の飯盛山は
此の舊名にて西条領のものなりされは此理に
あがり往生院は西条領のものなり候なり
この事と云々のあり候寺ふあることと云々候はぬ
又の勢ありきふよりてわづらふことあることと
ふと云候はぬなり

同日下才同下ウニ新に建水分三ツケと訓あり

これに古き訓はミツリなり候ものも甲人のスイ
ブと云りミツリトカスイブとあり候なり
との訓はあざざり候なり

同日下ウ本不見山モトミズとありこのモトミズは
年中の古候なり 赤若依松保^作保^作のモトミズ
とあり 松おらぬこの山も平のみ候なり
今甲人もおぬと云されは此の山がより久
し孤丸

同日下ウ楠木霊社トあり同日下才は南木トあり
ウノ方本篇に云方は孤丸 此の事と云候はぬ

あまのこころのやうな方印の物やうに
それといふは、是行のうへに、
清き書をのぬき、より、
よきと、是は、
かきかき、

桂宮

著作堂先生

使客集

北洋

伏魔傳 第四集

拙評

あつた徳祥
目録の
ハヤシ

三集の簡端よりこの書の書あり又けるなる属
の三蹟を載しきりしとふ初めぬ事あり只年譜
に似る事多く感服の至

三十一回荷高が本免六殺して本編と携へたの候
敬言書の三種を殺し又高を越す時石を擲て氷
を破し始末ありとぬめあり誠情をよみ読れり
りの成

荷高が勝たぬ梅と殺して坂の葛州島路中か

佳評

才之集五の巻の初り 其辭之氣あり
そりあて 跡いふくく 言ひく 余情を 跡し看
あふ情もまきまき ぬくぬく 跡を 別事う遷り
てあ後の 勢向う 流り 尋る事 ひとあひうく
又まう ありて 派水のめく 合く 分解 する
事 例の 事あり 志く 感心く 是等の 事あり
此志の 自評も あり 評も 及ぶ されとも ぬき
捨るまふ ありて 事あり 事人 及び 事あり
雷丸帝が 氣持 あり 事あり 切と 合あり 事あり

佳の又佳評
看可也の事あり

文選曰智者之意
慮於事形達者所
視視於事兆
事あり

始唐姫が 四賊と 討る 越成凡 漂き 事あり
かひの 事あり 浮く 人定 源文の 景を 事あり
軍や 師戸を 入る 事あり 事あり ぬけの 事あり
事あり 事あり 事あり

佳
文選曰策定禁中
功成野戦

始唐姫が 夜討を 事あり 事あり の事あり 神連を
事あり 事あり 物云の 事あり 事あり 又 事あり 事あり
て 事あり 事あり の事あり 事あり 神機 事あり 事あり
事あり 事あり 事あり

垣衣の評
むきなり

佳評

家語曰與善人居如
入芳蘭之室久而不
聞其香即與之化矣

安次がそ人そ敵と待しき由帝威のめてし
標と露しそ敵城を討し働ハ小評傳あり張清
が梁山十五雄と打倒し形勢も想像あり
目も見るめしむゆえ又垣衣の役つけし揚我
黙しそ又横とすし奴僕を割しそし
ぬけああるむむりしそし威心こし
自作が心志を注進しそたす貴公を木訥
に仁し通しそいふむすしそあしそし又他の奴
僕が自負の小城を縛るる母をうとあつてめ
し

隆光が仇人のとん坊唐姫お沈のそつて天罰
をるふしそしそこの文のふとこしそしそあれしそし
あしそし

看取者の
評格別
あり

先づ隆光仇人の後を混雜しそしそしそ場
あつそしそしそしそしそしそしそしそしそし
そののめこころハ控文妙工そし凡作の及ふとそし
あつそしそしそしそしそしそしそしそしそし
似意そし威腹そし
四人の生捕り傳のつて白状そし及ふ事あつそし
二人ハ勿心死しそしそしそしそしそしそしそし

荷二席の長
緒と紐
古事本
て折あり
糸の
糸の段の
線との
あり細海
まわし

漢書曰洗垢求
十六疵瘡

荷二席が隆光が破きつたに
持来とくして正直の客訴の
つとまのしを執成りたる
よき打し是等と例の
隆光と捕。縁塚の帷幕の誤ハ
二回を笑り依て評也
三十五回執成りたる捕んと
たぬと起し能のさぬめ
め

尚書曰天作孽
不可違自作孽
不可追

この隆光の
目とつら
高うと
費目と
の
橋本と
不
ゆい
有
娘の
作

隆光捕る時着皮初て
此の替ひもあつて
てをぬし又荷二席の
いと
弟之下ウ
みま
小紋二が
お

石をるる事
勸徳の事
言ふ事存の

造化の貴訓緩ふあり云々の文章を宏論し
しつあつてん事さつてん事
世の為世なり

佳評

就安が階を生捕しとを主の就成し出る
に人を譲り非を飾り小人の情さく後れ
りこし作之の自評もあは評を及りん矣
こゝもあつて

弟十二丁ウセ御メの合珠ハ多急珠七あるべ
し彫者の語し

佳評

就成がら成織を誦しと希二帝を放免也
階の凡作の及りざるありしとあり難きと
て去る事しつてん事さつてん事
此言あまかりしとありしと

佳評

之十六回就成畫が正世のお流し二應をんたし
ぬきつ都く注進しつと指し切を合算しつと
臣のさめとあつてん事
正世が初状より其實名
の文章を叶ひてをぬし

之選曰貧賤妻子
輕富貴他人重
吉也

湯家が時の権勢めえ事さつてん事
人情さつてん事
審判し一役つて又妖俗をぬきし起り

子原の御後
差代院の事
云々今
これの事
数
松と此
この
ふれ
而
り元

心懸りの外

嬰云が姑唐の娘に迫着んとて時忽く是
麻痺して醫居くはや形勢ハ水滸後得の
差代院院が最上院の國主を害して其傳と
共う其後宮の事んとて時忽く昏倒
せしむ似れども起す言外ありあらず
し用意とありて

佳評

姑唐の娘も自ら心苦のさめ威風凜凜と
て流るる宏濤妙中の又妙く評する
詞あり数文に述べんとて佳評をさす
又由良情恩の形容同くあり
き流るる何れ及りや作者の苦心
して実り其中の肝文之感服
姑唐の娘が太史令傳變の事ありて
其後例の事あり

源九の
子原の
松と此
この
ふれ
而
り元

ゆが高きと非人言ふあり
の事五集あり
け者ありて奇妙の趣あり
あり

垣長に投誠の洲を授けて身の守り

五行大義曰若有一
德能攘百文

高洋精妙
とてつた
のよき心

とや〜新工風〜殊文あり

蕃婦が持永の逢ふて客の姑唐娘と
交はる娘ありふあ便と同言ある文白別
〜〜をぬく姑唐娘の容貌の又四集
〜の三々あると新工〜て重復の
事あり〜き〜変化自由の文体ぬ中
のぬりて再〜熟練の外也事あり〜又持永
蕃婦がぬも俗傳例の事あり〜
〜〜説き〜〜のぬ

佳評

三十八回持永が蕃婦が各論を算て来〜具
せぬ姑唐の形〜愈怒〜詞を飾り父の
語辰人仰る〜め〜〜あり〜又愛あり
甘き云々の文一す〜〜あるをぬ
持永が河内へ赴く時自負して業平と比する
辰吾の王濠が後〜對〜自負〜
思ひや〜〜日父の威を借して志憚と
〜肆〜〜〜俗傳〜
〜〜流〜

是則船中と
よの越の異言
所以

本意と持永の専女とあや〜起るをぬ
〜〜と〜一役とつ〜作者の用心珍重に

佳評

泰陽が小六と恐ろしく此の事を悼む娘

る回本集
第一の頁見
うと解んと
うと文を
列に編ま
るる

信の情態さあや
持永の事柄が重々天より對する事方入致して去
眼鏡をそく穿を履りたぬをの人情さる
こ此度娘の長を思ふるありて人の心
頻りし物さ形路思ふがめ

才六丁オセシメ浮れてその假名とうつと
い郎との話あや

持永初て苦子の容貌をえて絶倒し心中
の述懐嘔吐し堪えさうさうさう

梅氏の女より、姑母の娘とめえお書
持永が心中さうさう

持永が事と利し導して二篇終るを告げ
さうさうさうさうさうさうさうさう

二十九の西虫が持永を頼む婚約を
う娘姑母の毎篇意ありあてい
さうさうさうさうさうさうさうさう
悲憤のあり

高木袁河内より来りて持永が意衷を察せし

史記曰君子漢以
親小人甘以絶
あひかハ本
集年早回
題目の評
あへ

佳評
伴其人多
予思卓見
瞭然と起
と評するの

吉岡洋
ちんちん

版のハハハハ輯の八百以兵尾が素直が心
中を見極めるとよ似てゐるとも思ふに異なり
〜 作名の用ゐる感心〜
真水表が智職新う〜 本誌を以ては〜 版の
物う〜 せ〜 ぬけのあ〜

恒るゝは
柳敷洋元
柳と此法
異をこの
を留ま
あり

真水表が表紙を〜 姑唐娘の供を省し
ハハハハハハの妙措が場田松倉を忘服
〜 義通の供を〜 にお似
〜 意味〜 別〜 せぬ
自作が積を買ふと〜 表紙ととの編編

姑唐娘表紙の版〜 疎林風を〜 して云
新刊の文作例の事〜 をぬりぬき
〜 の改訂天此表紙 懐舊の形勢ま〜
め〜 極妙のあ〜

史記曰先則制人
後則為人所制
佳

便覧眼志
蘇白のこの
舞長はれり
別々物事
ま〜 せぬ

姑唐娘が杉林の製字を〜 死様
活人草を何た〜 轆ろ〜 計田ハ
才三集〜 湯家石を轆ろ〜 惟えと計
〜 少〜 似〜 是〜 足す
作名の新考をぬり〜 感懐のあ〜
又殊危をうの云の文〜 ありと

臣範曰事不慎者
取敗之道也

己心已と相
まののち
この相も相
心腹とこそ
己の心腹
分明に
ありぬら
まの故あり

工部が如く此作のありては目とて
ありて感心

持永が從者として姉唐娘の轆子を標奪し
隨在破貞を禁絶し又死後再生し
二十回死後再生し相執りて人々迷惑せしむ
目みえぬめし然るまゝ自ら表が幻術にて心腹
と倒して後を果せし工部を如く
仍きとて

言評

為之節 長徳が不料と念を以て彼の志を
如く此徳が名香の餘薫り春心動きて為
二篇を轆子のゆり引入りのまよと流す
ものも渾てこの工部例のまよと殊
あり

この水滸傳
の唐氏院の
寺のまよ
まよのまよ
あり

家表が持永より名香をまよと 其徳と 審察
し 水滸傳の唐氏院が共傳りて
まよの長女を強て妻とせしめし 似る
あれを仍言ひてまよのまよと又長徳を
幻術にて後し 新章の如考とあり
感服あり

七字の
 二行の
 の腹指
 へん
 有官達
 多一官
 嘆息
 万の
 君玉
 事
 せん

一日千秋

天保六年乙未六月初九夜

二更終下

景平 子稿

何とあつて... 桂島子... 八丈傳九...
 評... 思... 書... 是... 何...
 評... 事... 事... 事... 事... 事...
 別... 文... 加... 考... 考... 考...
 先生の... 苦心... 及... 馬... 考... の... 事...
 却る... 通... 創... 事... 事... 事...
 事... 事... 事... 事... 事... 事...
 事... 事... 事... 事... 事... 事...
 事... 事... 事... 事... 事... 事...
 事... 事... 事... 事... 事... 事...
 事... 事... 事... 事... 事... 事...

やまのつら則伏線之又八九の廿廿院やど姑麻の那の重宝物失の
院は姑麻の那油裏に占ありひの千金をもちて来るも返りて打
換わりの後とありてこそよき返りてあるとありひの法は氣ゆき持
永にそりてよの梅氏の重宝と初来するも伏線よの伏線
またありぬういをひくををるひの分明るん枚屋に自違ひよ
また又照應の律詩と對句ととも如く彼と此と越向は對を專
りて厚き本編第一集小六の夢は又義隆の旨叙を編む匠
螢火の暗夜を照らすありかといふに集姑麻の那復能書の
段に全圖を以て螢火のりあり是則照應やと彼と此と對を
取とり又これを正對とらふと以て螢火の對を所以と
又本集の姑麻の那の體よは體を容れ身香りて凶徒を

欺く越向の分三集の満家や姑麻の那といひてせう體よを
とれ置言と反對之初の石やう流るの體よれは越向の
とももの物同一かた故にこれらと反對といふことゆるこの段の
また體よは流るの石を體よよ入れ維克を計りてあるとゆい似
よれよとては且のせひのれるも照應反對の意といふよな
るん故れ他者の用意と粗體らめゆかたもよん唐山名人の
釋史から越向のよのりよのよとほめくもるあるよ
愚説の煙とて知らるるよあるよ
又重複の只竹もよるん作者測りて前後のやや言ひるよを
かたよよもゆも名ゆるれよ水清は西北記に重複二にす所
ありよの重複と照應のゆるよのやや重複の作者の測り

あれなりしも足よも照し心作志の故意ゆり致る趣向なりあり
く同一なりし具眼の者官一目又れい分別もよと難くもあ
吉田子の和化もよあゆまを知らく作ものありあへん

又襷摺の趣向の下深之金聖其敷水海の聲進み襷摺
とありありしあゆの襷摺と伏線と似る申うなれと襷摺の下
まの義伏線ハ里生チをうかへりまれのあつて別之まき
廣山の和化とえん心まつるあまのれ共の傳子談一の
傳のりし易作の都々これありあまのりし和説はし
忍れまの心同好ニ身惜まを後しん

○叔本集作者第一の関目ハ特永主僕ウ千里鏡の段ハ
あつて趣向のあつて己前ハ楠正直の庭中の山より千里鏡

の八九の巻を

とゆゑ観るゆあり是則後回持永主僕ウ千里鏡の襷摺
心襷摺伏線と異書ゆりてこれらあり異言合さるへん
抑持永の姑摩姫と着意の段ハ作者ハ難美の功あり
あつてゆゑ言言二橋後集の趣向ハ本つて千里鏡と
まのりし言言二橋後集の趣向ハ本つて千里鏡と
まのりし言言二橋後集の趣向ハ本つて千里鏡と
あつてゆゑ言言二橋後集の趣向ハ本つて千里鏡と
の段を七見兵衛ハ在世の日橋本と校閲せし折あり
感服のりし言言二橋後集の趣向ハ本つて千里鏡と
あつてゆゑ言言二橋後集の趣向ハ本つて千里鏡と
関目とえ選一のりし言言二橋後集の趣向ハ本つて千里鏡と



